



明化の教育

9月号(第448号)
平成29年9月1日
文京区立明化小学校
校長 溝畑 直樹

「静心」の時間をつくる

校長 溝畑 直樹



6年生が岩井の砂浜に何気なく書いた「明化」の文字

猛暑の日があったかと思えば、後半はぐずついた天候が続くといった場合に、子供たちの体調管理には例年にも増して気配りが必要な夏休みでした。今日から二学期。始業式には、307名の子供たちの元気な顔がそろいました。この休み中、大きな事件・事故などに巻き込まれることもなく、皆が無事に過ごせたことに対し、保護者・地域のみなさまにまずもって感謝申し上げます。

また、6年生は夏休み中に岩井臨海学校を実施しました。宿泊行事を経験するたびに大きな成長を見せてくれる6年生。今回は、500m 耐久泳にチャレンジした子供たち全員が完泳という、まさに快挙達成です。5分前行動をはじめとした生活態度、係活動や清掃もこれまでの宿泊行事以上

に充実した内容で取り組み、学校のリーダーとしてのプライドを見た思いがしました。

さて、今年も甲子園球場では、高校球児たちによる熱戦が繰り広げられ、多くのドラマと感動が生まれました。選手と応援団、そして観客、郷土を思う多くの人々の思いが一体となったこの大会独特の雰囲気は毎年変わることがなく、まさに日本の夏の風物詩です。そんなすばらしい大会に水を差すわけではありませんが、「やはりそうだ…」と確信したことが今年一つありました。開会式の様子をご覧になったでしょうか。整列して話を聞いている中で、体の動きが止まらない選手が近年増えてきているとお感じになりませんか。本校でも似たような状況が散見されます。どうも近頃の子供たちは「止まる・止める」をあまりしなくなってきたような気がします。

子供たちを見ていると、行為と行為との間に「間(ま)」のない生活をしているようです。例えば、ゲーム機などは何度も繰り返し遊ぶことができます。「もう一回、もう一回」と思いのままに続け、いざゲームを終える時というのは「ご飯を食べる」や「習い事に行く」など次の何かが始まる時とびったり連続していることが多いようです。一つのことが終わって、次のことが始まるまでの何もしない時間、つまり生活における「間」はそこには存在しません。変化の激しい現代では「停滞することは後退」と言われ、常に動き続けることが求められがちです。そんな慌ただしい生活の中だからこそ、何もしない時間をつくるというのは、思いの外、大切なことと考えます。「止まっている時間」とは自分の中にゼロの状態を意識して作り出すこと。ゼロは何もしていないのと同時に、どの方向にもスタートできる状態でもあります。一度止まるからこそ、自分の進むべき道、目標を確かに見定めることができるのではないのでしょうか。また、止まっている時は、否応なしに自分自身と向き合うことになります。そこでは、省察(自分自身をかえりみて、その良しあしを考えること)が行われ、様々な心象を呼び起こします。つまり、「止まっている時間」こそ、「自分とは何者か」という問いへの理解を進めているといっても過言ではないと思います。

本校では、毎日の生活の中で「止まる」ことに意識的に取り組ませています。チャイムが鳴っている間は動きを止める、授業開始の挨拶の中で黙想をする、立ち止まって挨拶をする、そして、全校朝会での静心の鐘。こういった「間」を学校生活の中に意図的に設定し、それを6年間積み重ねることで、子供たちには、気持ちを上手に切り換える力、自分の体の動きをコントロールする術(すべ)が身に付くと考えます。「止まること」の大切さを理解し、自分自身といつでも正対できる人になってもらいたい。これこそが明化小がずっと大切にしてきた「静心」というものの本質です。

蓑和田智子教諭が出産のため、今学期から第3学年2組は、藤井 満代(ふじい みつよ)教諭が学級担任をいたします。どうぞよろしくお願ひいたします。